

《中学生の部》優秀賞

『手紙屋』から学んだ初めての気づき

港中学校 一年

青木 千織

私が『手紙屋』蛍雪篇を手にとったきっかけは、学校の学年通信に先生が紹介していたからです。自分も、主人公と同じで将来何になりたいのかが分からないから、どんな手紙が送られてくるのだろうと興味を持ちました。

この本は、私と同じような、将来何になりたいのかが分からない人や、勉強することの意味を知りたい人が読むと、新しい発見ができること間違いなしです。

ストーリーは、高校二年生の主人公、和花が進路に悩んでいて、兄から『手紙屋』という存在を知るところから始まります。手紙屋との文通をしていくうちに、大切なことを学び、和花の考えが変化していくという内容です。

私が本を読んで印象に残った一つ目の言葉は、『家に帰ってから最初に座る場所で、自分の人生が決まる』です。この言葉にとっても共感すると同時に、「ドキッ」としました。なぜなら、私も学校・部活から帰ってきて、最初にソファに座るとやる気が

出ないけれど、すぐに机の前に座ると宿題が早く終わるという経験があるからです。また、『人生が決まる』という言葉に「何気なくしている行動で、人生が決まっちゃうの!？」と驚きました。

二つ目の言葉は、『勉強は一つの道具にすぎず、自分をピカピカに磨いて、昨日とは違う自分になるためにある』です。『勉強で自分を磨ける』という部分に少し不思議な感情を持ちました。私は今まで、「自分を磨く」というのは好きなことをするなどの、楽しい気持ちになれるものだと思っていたからです。ですがよく考えると、勉強で知識を増やして、新しい自分になることも「自分を磨く」ということなのかと、新しい考えができました。

最後の三つ目は、『やるべきことというのは、将来の自分が、今の自分にやっておいてほしいこと』です。この言葉は、私が本を読んだ中で一番心に残りました。私はよく「宿題しなきゃ」「ピアノの練習しなきゃ」と思っていました。この時の気持ちは、

「やらなくてはいけない」という後ろ向きな思いでした。だから、この言葉を読んで、「なるほど!」こう考えると、今やっていることが、将来のためにつながっているんだな」と感じる事ができました。あまり得意ではないことも、未来の自分のためだと思えば、少し、後ろ向きな気持ちが薄れると思いました。

私はこの本を読んで、自分にはなかった考え方を学びました。考え次第で、勉強に対するやる気も全く違うことに気がつきました。これから先も、さほりたい時や後回しにしたいな

《中学生の部》優秀賞

私とカズの想い出

西朝明中学校 二年

佐藤 陽

「今回の本はどうだった? すてきだったでしょ。」

本が届き、少し経つとカズから連絡が入る。

カズは私の祖母で、私の良き理解者であり友人です。

私は、生まれてから十四才になるまでの十四年間、誕生日、クリスマスなどのイベントには、決まってカズから本のプレ

と思う時に、手紙に書かれていた言葉を思い出したいと思っています。そしてプラスのイメージで考えると自分の気持ちも楽になるという大切なことにも気づかされました。



ゼントが届いた。カズが選んでくれる本はジャンルも一通りではなく様々で、毎回、「今度はどんな本が来るだろう?」と、とても楽しみにしている。しかしたまには、その年の私には難しく、なかなか手を付けられない本もあった。けれど、その本も数年たつと、私の目にふれている。そして、

「あの本だけどさ、読んだよ」と遅ればせながらの報告をする。するとカズは、とても喜んで「うんうん」とうなずき、感想を聞いてくれる。

けれど、ずっと不思議に思っている事があった。カズが贈ってくれる本は、私の年齢に合った文字で書かれた本ばかりではなかった事だ。幼稚園児の私に読めるはずのない漢字が並んでいて、読むのにもとても苦労した思い出もある。そんな時は決まって私は母と毎日のように本を読んでいた。母は、ひらがなの部分も、漢字の部分も、指でなぞりながら本を読んでもくれた。そんなある日、

「お母さんはどうしてそうやって本を読んでくれるの?」と聞いてみた。すると母は笑いながら、

「お母さんもこういう風に本を読んでもらったの」

カズが贈ってくれていたのは、本だけではなかった。祖母と母の想い出の続きを、私に贈ってくれていたのだ。そこに私も加わって三人の想い出となった。

私は本が大好きだ。嬉しかった時も、悲しかった時も私の側には本がいて、私をまっけてくれた。そして静かにそばにいてくれた。本は心の栄養だとよく言われるが、まさに私はその事を実感して育った。いつか私も父になるかもしれない。その時は、私も自分の子供に、私が

してもらった様に本を読んであげよう。そうすれば、カズが贈ってくれた想い出は、次に受け継がれて、想い出は続いて行くだろう。

拝啓 カズ様
親愛なるカズ、いつも沢山の愛をありがとう。
あなたの心の友より

《中学生の部》優秀賞

王子さまとバラ

山手中学校 二年

後藤 恋奈

「意味がわからない」これが私が初めてこの本を読んだ時の感想だ。この本を初めて手に取ったのは小学校六年生の時。本屋さんに置いてあったこの本の題名と表紙に惹かれて読み始めた。

当時六年生の私にはこの本のテーマである「生きる意味」などわかるはずもない。二回読んでも三回読んでもわからなかった。しかし、中学二年生になった今少しわかるようになった。

この本は、たくさんの星に行って地球にたどりついた王子さまの話聞く、「僕」と読者が、生きる意味を問いかけられる本だ。しかし私が思うこの本は、王子さまが地球に来て色々な人と出会ううちに自分の星に置いてきたバラの大切さや責任に気づくことで、王子さまが成

長し、またこの本を読んでいる読者も一緒に成長していく本だと思う。

私はこの本は作者の話なのか、なと思った。王子さまが作者でバラが作者の大切な人（恋人）。作者と大切な人がけんかしてお互い距離を置くけれど、やはりお互いの大切さに気づき元の関係にもどる。そんな作者の実話がこの話になっているのかなと思った。

私はこの本を全国の中学生にすすめたい。中学生は思春期で家族が嫌になってしまったり、友達とのトラブルが起きやすい時期だと思う。そんな時にこの本を読むと、家族や恋人など自分の周りで自分を支えてくれる人の大切さに気づくことができる。また、自分の行動に責任を持つようになる。大人に

なるまでの中学生のうちに行動に責任を持つことができたなら社会に出た時、とても役に立つと思う。

私は最近「親友」と呼べるくらい仲が良かった子とけんかをした。理由はとても小さなことだけれど不満がたまっていたでそれぞれ言いあった。そしたら、先生に話を聞かれたりして、大事になり、気まづくなってしまう話さなくなってしまった。私は最近久しぶりにこの本を読んだのだが、けんかをしている時、あるいはする前にこの本を読み直していたら何か変わっていたのかもしれないと思った。落ちついて話し合うことができたかなと思う。私は今、いわゆる「思春期」なのだろう。母と言い合いになることはあまりないが、姉と言いつい合いになることがよくある。言い合いになってお互い話さなくなっても次の日に

は普通に話していることもよくあるし、けんかをするのは仕方のないことなのかもしれないけれど、そういう時にこの話を思い出すと何か変わるかもしれない。

この本を読むことで、家族や恋人など自分の周りで自分を支えてくれている人の大切さに気づくことができる。また、自分の行動に責任を持つことの大切さに気づくことができる。色々な星にいる人の各々の生き方についても書かれていて、読む世代によって感じ方が変わるのが魅力だ。多くの人に読んでほしいが特に思春期の中学生に読んでもらいたい。



《一般成人の部》最優秀賞

受け継がれる鼻

的場 大地

「鼻」脊椎動物の嗅覚の受容器。顔面の中心に位置し二つの穴がある感覚器。

こんな題名の本を私は小学生の小学年時に母から渡された。母曰く、自分も母から、私から

すると祖母から同じような年頃にこの本を渡されたらしい。

鼻、この短く簡潔にあらわされた題名に当時の私は全く内容を想像出来なかった。母にどんな本か問うても、読めばわかると言って教えてもらえなかった。読んだら感想を聞かせてほしいとも言われた。

この程度、教えてくれればよいのにと釈然としないながらも言われるがままにこの本を読んだ。すぐにこれは難しいと感じた。当時の私には知らない言葉が多く、また仏教用語が頻出し、いちいち読書の手が止まった。それでも母も祖母も読んだという本に負けたくないという思いで何度も電子辞書を叩きながら丸一日読破するに至った。短い短編にこれほど時間をかけたのは後にも先にもこれだけである。

それから母に感想を聞かれた私は当時なんと答えたのだろうか。たぶん、難しかったとかお坊さんが結局、鼻が戻ってかわいそうとかその様なことを母に言ったと思う。母はそんな答えになぜか満足そうに嬉しそうに「そう」とだけ言ったのをはつきり覚えている。

この読書体験は今でも強烈に私の印象に残っている。母は私に何を伝えたかったのだろうか。また、私の感想にどんな思いを感じたのだろうか。このことを思うと私は祖母に考えがい

最初に母にこの本をすすめたのは祖母だ。祖母は読書家でも枕元に本を置き読んでいた人だった。そして、鼻が長く驚鼻が印象的だった。もしかすると祖母は主人公と同じように鼻にコンプレックスを持ちその解答をこの本に見出したのではないだろうか。主人公は大きい鼻にコンプレックスを持ち、とある手段を用いて鼻を小さくする。それでもなお、依然として他者から嘲笑の的になる。鼻を短くしても悩みは解消されない。そして、鼻は結局元に戻る。だが主人公のコンプレックスは解消される。

重要なのは自分がどう思うかではないだろうか。誰しもが多かれ少なかれ同じようにコンプレックスを抱えている。他人がどう評価しようとも自分が納得できればそれでよいのだ。それ

を、祖母は母に、母は私に伝えようとしたのではないだろうか。祖母の鼻は驚鼻。母は祖母より小さい驚鼻。

私は父方ゆずりの団子鼻。三者三様で全く似ていない。鼻の形は遺伝されなかった、しかし『鼻』を通じてその思いは三世代にわたり受け継がれたのではないだろうか。もし私に子供ができたなら、祖母が母に、母が私にすすめたようにこの本をすすめたい。



《一般成人の部》優秀賞

「風と共に去りぬ」と「表現の自由」

松本 康

永遠の名作映画と評価されている『風と共に去りぬ』の映画の配信が、ある黒人脚本家の批判意見で一時中止されていたと

いう。白人警官による黒人男性の殺人事件をきっかけに全米規模で人種差別撲滅デモが蔓延していることの流れと見られる。

私は、中学二年生の時、この小説を読んで大いに感動した記憶がある。内容の殆どは忘れているが、黒人奴隷の乳母が主人公のスカレットにドレスを着せる場面の印象をおぼろげながら思いだしている。当時は、奴隷は家畜扱いされている程度の知識しかなかったが、この作品で白人家庭の乳母として働く奴隷もいることを知った。

この小説は、南北戦争時代のアメリカ南部を舞台に書かれている。作者のマーガレット・ミッチェルは子供の頃に聞かされた南北戦争の知識をもとに、二十六歳（戦後約六〇年）から書き始めている。

南北戦争は、北軍が勝利しリンカーン大統領によって奴隷解放が宣言された。しかし、奴隷解放後も黒人は虐げられ、白人による迫害により度々黒人デモや暴動が発生している。ノーベル平和賞を受けた黒人のキング牧師による一九六三年のワシントン大行進の公民権運動の演説は有名である。

小説は扱う時代の出来事や人情や考え方を反映するものであり、作者の見方も表現されている。この作品はマーガレットが奴隷制度を認めた訳ではなく、当時のアメリカ南部の雰囲気や伝えているのではなからうか。しかし、時代が移り人権意識が高まれば、その尺度によって評価され直すこともある。昔の名作とされる映画におい

て不適切な表現や差別用語が使われているも、比較的軽微であると判断される作品については、原作者の創作意図を尊重して、あえて修正することなく、断りのスーパーを入れて放映しているものもある。

戦後の憲法のもとでは、表現の自由を踏まえつつ「公共の福祉」に抵触するかという観点等により表現のあり方が問われる場合がある。筒井康隆は、その作品の中に差別的表現があるとして抗議を受け、断筆宣言したこともある。

このような事例は事欠かず、わいせつの定義が問われたチャタレイ裁判、あいちトリエンナーレ「表現の不自由展」等も、「表現の自由」を主張する側と公序良俗を主張する側との対立

《一般成人の部》優秀賞

私の読書論「多読多得」

高波 功

この十月で満八十歳を迎える隠居分である。

昭和三十八年、東海道新幹線開業の年に就職し、平成十四年に定年退職。佳き時代であったと、感謝している。この間の楽

が生じ、様々な意見が飛び交っている。

『風と共に去りぬ』も、一読者としては文学的感興に浸り、南北戦争時代のアメリカ南部の状況や人種差別の実態を知ることのできる歴史的意義のある貴重な文学作品としての地位を保って欲しいものと切に願っている。

